

令和2年度 燕市総合教育会議 会議録

1 日 時 令和3年2月22日(月) 午後3時30分～

2 開催場所 会議室 101～102

3 出席者の氏名

市 長 鈴木 力

教育委員会

教 育 長 山 田 公 一

教育長職務代理者 山 崎 克 弥

委 員 中 野 信 男

委 員 秦 久 美 子

委 員 斎 藤 純 郎

委 員 小 林 恵 子

4 説明のため出席した職員

教 育 次 長 宮 路 一 規 教育委員会主幹 鈴 木 華 奈 子

学校教育課長 太 田 和 行 子育て支援課長 白 井 健 次

社会教育課長 石 田 進 一 企画財政課副主幹 小 杉 茂 樹

統括指導主事 大 森 亨 指 導 主 事 小 池 克 行

5 事務局書記

学校教育課 向 井 康 弘 他 1 名

6 傍聴人 なし

7 令和3年度当初予算(案)について

8 意見交換

(1) ICTを活用した教育の充実について

次第 別紙のとおり(2ページ)

意見交換(概要) 別紙のとおり(3ページ以降)

令和2年度
燕市総合教育会議
＜次 第＞

令和3年2月22日(月)午後3時30分から
会場：会議室101、102

1 開 会

2 市長あいさつ

3 令和3年度当初予算(案)について

4 意見交換

(検討テーマ)

(1) ICTを活用した教育の充実について

5 閉 会

1. 開会宣言 午後 3 時 30 分

2. 市長あいさつ

教育委員の皆様にあつては、普段、教育委員会の枠組みのなかで教育行政について議論いただいているところと思うが、本日は総合教育会議ということで、教育委員会の枠を超えて、さらなる総合的観点から、燕市全体の教育の向上に繋がる会議になるようにしていきたいと思っている。教育委員会の専門的な議論に加え、通常とは違った観点からの議論も交わしていきたいと思っているので、教育委員の皆さまから忌憚のないご意見をいただきたい。

3. 令和 3 年度当初予算（案）について

学校教育課、子育て支援課、社会教育課の 3 課長が「令和 3 年度当初予算のポイント」を使用し、教育委員会に係る令和 3 年度当初予算（案）について説明。

○委員（斎藤 純郎）

教育委員からの予算要望にも応えていただくなど教育に力を注いでいただきありがたい。また、念願だった小中学校のトイレの乾式化・洋式化に取り組んでもらい感謝している。

○市長

教育委員会の所管事業ではないが、県央基幹病院の令和 5 年度の開院に向け、看護師の確保は非常に大きな課題であるため、県や県央地域の自治体と連携し、看護職員修学資金貸付事業を新たに創設した。この修学資金は県の貸付と併用すると最大月 10 万円を借りることができ、さらに市が指定する医療施設に 5 年間継続して勤務した場合、返還免除となる。ターゲットとなる学生は、教育委員会の奨学金と同じなので、連携した事業が始まることになる。

4. 意見交換

(1) ICT を活用した教育の充実について

小池指導主事が「ICT を活用した教育の充実について」の資料説明を行い、その後に意見交換を行った。

○委員（斎藤 純郎）

タブレット端末を使用して個別学習ができるようになるとのことだが、習熟度に応じた学習ができ、一方的に先生が伝えて学ぶのではないということで良いか。

○指導主事（小池 克行）

個別最適化した学びという機械が与えた問題を自分の習熟度に応じて進めるイメージが強い。そういう良い点もあるが、もっと大きくとらえて子どもが自分の学びを振り返り、さらに足りない部分や自発的に学んでいく支援を ICT はできると考えている。

○委員（斎藤 純郎）

一人一人の学習履歴が把握できるのは非常に有効だと思うが、個々の児童の理解度の差をその後どう埋めていくのかが教員のスキルになってくるのか。

○指導主事（小池 克行）

ICT だけでなく子どもたちの現状をしっかりと教員が理解し、授業改善や個別支援などが必要になってくると考える。

○委員（斎藤 純郎）

多くの予算を投じて設備を整えてもらいたい。ICT を使ってアイデアを練り、自分で学び、それを発表してグループで討議を行い、新しい発想を見出す力を育成してほしい。そして、自分で考え問題解決力を高め、社会に出ると直面することになる「答えの出ない問題」への対応力を身につけてほしい。また、そもそものアイデアの種は自分が一生懸命勉強した知識がベースになっているもの。このベースがないと新しいアイデアを生み出すことはできないと思う。そのためには、読書や様々な経験が必要だと思う。幸い、燕市では、「読解力育成プロジェクト」や「つばめ長善プロジェクト」に取り組むこととしており、積極的にチャレンジしてもらいたい。今後は、ICT を活用することと並行して自分の知識の量や経験値を高めるように、力をつけていってほしい。

○指導主事（小池 克行）

ICT によって学びが広がるとともに一人一人のしっかりした知識の習得もおろそかにせず取り組んでいきたい。

○委員（小林 恵子）

他市のタブレットを活用した英語の授業を見たが、問題が3つあると感じている。1つ目は先生がプレゼンテーション資料を一生懸命につくるのは良いが、それに時間をかけすぎて生徒への指導がおろそかになっている。プレゼンテーションは次から次へとシートが変わっていくので、黒板の板書と違い、なんとなくやっている感じの授業には見えるが定着率が非常に低くなる。板書なしでプレゼンテーションを見せられて、「はい終わりました。わかりましたか」となっているパターンが多いのが非常に問題だと思う。2つ目は最終的に先生が出した問題の答えを生徒自身がキーボードで入力しようとした時に子どもたちのキーボード操作が非常に未熟だった。頭の中で文章を考え、こう答えたいと思っている部分でも危う

いのにキーボード操作で頭がいっぱいになり非常に困って時間がかかっていた。最後の3つ目は発信型の授業の際に、こんなことを言いたいという中学生なりの本人の気持ちがあり、それを英語に訳すためにインターネットで検索したところ、中学2年生レベルではとても理解して使えないような英文が出てくる。それをそのまま手書きで写している生徒がおり、なおかつ間違えて写していた。それを教科担任がチェックをせずALTに任せていた。母国語のためALTには通じていたが中学2年生の答えとしては全く合致しない授業だった。発音もできない、意味もわからない英語をただ読むだけの授業にタブレットを使う意味があるのかと思った。先進的に取り組む姿勢は良いのだが非常に問題が多いと感じた。視察した研究授業は操作が行き詰った時にサポートしてくれる人はいたが、タブレットを使用して日々の授業を行うのは一人一人の先生が操作に長けていないと50分授業が実質35分程度になることもある。タブレットを用いた授業を始めると色々な問題が出てくるので、そこをどう教育委員会としてサポートしていくのか。デジタルを万能とせず、アナログで昔ながらの板書もうまく使いながら最終的にICTを使って良かったという授業を積み重ねていき、その成功事例をできるだけ早く伝えていけるような仕組みを早く立ち上げてほしい。

○指導主事（小池 克行）

パワーポイントの資料に力かけるあまり、板書やこれまで大事にしてきたことがおろそかになり、子どもたちの理解につながらないことがある。アナログとデジタルのバランスが大切でデジタルを活用できる場面、アナログが有効に働く場面があると思うので、そういった点をしっかりみていきたい。子どもたちのキーボード操作が未熟という点は子どもたちの発達段階に応じて取り組んでいかなければならないと思っている。いずれにしても先生方が戸惑って50分の授業が35分になるのは本末転倒であるので、そういったことのないよう、学校組織の中で堪能な先生やそうでない先生のすべてが頑張っていけるような取組ができるように支援していきたい。色々な課題が今後出てくると思うが丁寧に対応していきたい。

○委員（秦 久美子）

学校の先生の中でデジタル機器の取扱が得意な人とそうでない人、それぞれのスキルの片寄りで学校間に差が出ては困る。学校の中でということではなく、教育委員会として全校が同じレベルになるようにバックアップしてほしい。また一斉学習に関しては皆同じ状況で学習しているので良いが、個別学習となって家庭内に持ち帰って学習することになるとWi-Fi環境が整っている家庭とそうでない家庭があると思う。そうなる家庭によって子どもたちの学習環境に差が出た場合にそれをどう先生がフォローして、差を補ってくれるのか。保護者も子どもがパソコンを触っていれば学習をしていると思っていると他のことをしていたりすることもある。何をしていたかは全部記録が残ると聞いたがこの辺のチェック体制はきちんとしているのか。学校間の差と先生のレベルの差を補ってくれるシステムを整えてほしい。

○指導主事（小池 克行）

先生の ICT の情報活用能力の差、学校間の格差については、学校ごとの取組を市内すべての学校で共有できるようにし、良い取組は市内 20 校に広がるようにしていく。それだけではなく、教育委員会としても研修を行うとともに、指導主事が学校を訪問して丁寧に支援を行う。令和 3 年度のスタートにあたり、教育委員会として学校を支援することは非常に重要だと思っている。先生によって指導に差が出ないように研修や支援を行いたい。タブレットの持ち帰りについては、まずは日常の活動の中で先生方が使いこなせることが大切だと思っているため、今のところ想定していない。今後は国の動向もあるが、家庭の Wi-Fi 環境がしっかり整備され、家庭の理解も得て、と段階を踏んで十分理解を深めた段階で持ち帰りができるようになるのではないかと考えている。

○委員（山崎 克弥）

ICT の利活用については、先生には定年間近の人からなりたての人までたくさんいて色々な教科を教えているが、今持っているスキルをどのように ICT に乗せこめるかが一番重要である。得意な人も不得意な人もいるが、支援員の力が特にこれから始まるものに対しては非常に重要だと思う。最初が肝心なので最初に燕市の先生がどんどん周りをリードするくらい、支援員の指導に期待している。当初考えていたのは、ICT 活用のうまい先生の授業を流していれば子どもたちの学習は進むと思っていたが、なかなかそういうわけにはいかず、対面授業の方が進むということもこのコロナ禍の中では色々で見聞きすることがあったので、やはり先生との対面授業が重要なのだと感じている。これから取り組むということで不安と期待があると思うが、ぜひ滑り出しをスムーズに行ってほしい。

○委員（中野 信男）

文部科学省はよく考えたと思う。基本的にはすごく今の時代が要求しており良いことだと思う。我々も家庭にパソコンが入ってきた時は使える人もいたが、使えない人もたくさんいた。それが段々と慣れてきて今に至っている。立ち上がりはどうするかという問題が一つあり、先生も生徒も慣れていないということで、理想としての教育は、先生が人間として教えることを子どもたちに伝え、子どもたちがそれに共感することだと思う。AI に全部の教育を置き換えて AI が子どもたちを育てるのはおかしいと思う。先生の人間性が大事だと思うので、そことデジタルをうまく活用して教育していくのが大事だと思う。その立ち上がりの折り合いをどうつけるのか、ある程度 10 年、20 年使い続けると日常的なものになっていくと思う。将来はどうなっていくのか、これを極端に進めていくと AI で教育のすべてを行い、人間はいらないという極論に達すると思う。将来について文部科学省はどう考えているのかという将来像、俯瞰してこの活動を上から見て将来どういう方向へ行くかは大事だと思うので、先生は特にそういったことを気にして勉強することも良いと思う。立ち上がりの過程や将来のことを考えると先進地はすごく参考になる。海外の先進地の取り組みも参考になると思う。海外ではすべてをタブレットの中に入れて教科書がないという国も多くあると思う。

タブレットの持ち帰りも文部科学省は考えていないのだろうか。今は対応できないと思うが持ち帰り等の将来像に関心をもって考えていかなければならないと思う。

○教育長

燕市が最初にパソコンをタブレットに入れ替える時の議論として、あくまでツールなので使うことでどういうメリットがあるのかをしっかりと把握しておかなければならず、すべてこれを使えば大丈夫ということではないとの議論があった。道具としてどういう場面で使用すると一番効果があるのか、そこを考えながら取り組むことが大事だと思う。指摘いただいたように入りかけの今が一番大事な時だと思うので、先進地の取り組みなどを情報として入れながら先生方からうまく使ってもらうことが入り口の部分だと思う。機器の整備が終了し、準備が終わりこれから走り出す時なので、走り出しのところをしっかりとらえて、まずは先生方からそこをよく理解してもらうところからスタートしていかなければならないと考えている。課題はたくさんあると思うので一つ一つ丁寧に潰していきたいと思っている。

○市長

燕市は吉田南小学校で一人一台のタブレット授業を平成 26 年に開始した。吉田南小学校で始めていた状況の課題を整理しながら普及するというのと、これは全然意味が違うのか。他市に比べると一つ先に走っていた部分があるのでせっかく先にやっていたのであればそれをうまく活かしながらやってもらえばよいと思う。色々と課題はあると思うが、これをやらないという訳にはいけないので、積極的に取り組みながらいかにうまくするか、非認知能力の生きる力はパソコンからだけでは得られるものではないので長善プロジェクトなどにどんどん取り組み、燕市は ICT を活用した教育に取り組みながらもしっかり人間力の育成も行いつつ、時代も取り入れているというところで教育委員会は取り組んでもらえるとよい。委員の思いもしっかり受け止めながら「ICT を活用した教育の充実」に取り組んでほしい。

5. 閉 会 午後 4 時 30 分